

大阪のお姉ちゃん

照
伝
光

目次

前書	3
登場人物	5
その一 霧の摩周湖	7
その二 知床	21
その三 岩手山	35
その四 神戸	47
その五 筒石	61
その六 瀬戸島	74
その七 京都	84
その八 烏来(ウライ)	100
その九 熊本	110
その十 黒馬大池	120
その十一 離遠	132
その十二 大阪の家	144

その十三	湖北	1	5	4
その十四	再会	1	6	6
その十五	美英子抄	1	8	2
その十六	訪れ	2	0	0
その十七	シヤボン玉	2	1	6
後書		2	2	8

前書

この小説の時代設定は昭和四十年代後半（一九七〇年代前半）。大阪万国博覧会が開催された頃（一九七〇年三月～九月）から話が始まる。バブルがはじけた平成と違って「明日は今日よりいい日になる」と誰もがそう考えていた頃の話。周りには貧しさが残っていたけれど、深く考える事なく幸せ軌道に身を任せればよかった。明るい時代だったから大いに恋をした。そのころ結婚ついて次のような風潮があった。

二十歳に近づくと共に女子は結婚を考えた。そこに深い哲学があったわけではなかった。何か二十五になると「ババア」呼ばわりされた。大学へ行くと卒業時二十二になるから二年制の短大に人気があった。二十ハタチという成人になったばかりの未熟者だが、先輩から見れば誰もがうらやむ青春の頂点にいる。と言う事はそこから下り坂。二十五はもちろん三十を超えると「もう若くない」。よく言えば「立派な大人」と自他共にそう思っていてそれが社会の常識だった。

この時代には夜間の高校や大学が多数あった。授業料は安く国立大学の夜間なら月八百円だった。高卒の初任給は五万円ぐらい。電車の初乗り運賃は二十円ほど。学食のきつねうどんもそれぐらい。貧しい家に生まれても勉強すれば国公立大学の医学部に入学して医者になれた。

前書

学生が車を持つどころか運転するなどあり得なかった。レンタカーが普及し始めたのは都会だけで地方を旅するのは不便だった。自然は残されていて、例えば知床半島は林道を使って先の先まで行けた。一方で公害が拡がった。

「チャットGPT」や「AI」などはなかった。もし「AI」があつたら「愛」と呼ばれたかも知れない。最近はカタカナ文字が溢れて意味がよく分からない文章や会話が多いが、この頃は日本語特有の情緒ある表現が多かった。

インターネットもなく、情報は少なかつたから勝者と敗者の差は微々たるもので勝ち負けは余り関係がなかつた。

大阪は東京とまだいい勝負をしていた。万博もあつて元気一杯だった。その頃の大阪の若者——筆者の同級生や少し上の先輩、少し下の後輩たちが繰り広げた恋を練り固めて物語にした。そう練物——蒲鉾をワサビ醤油に浸けてピリツとした辛さにちよつぴり涙して、酒でも飲みながら読んで頂ければ本望。

なお、実在しない地名や実際の場所と異なる描写もあるが、それが「ワサビ」になっているのでご容赦願いたい。要はいい加減。すいません。

登場人物

男

二世 守 (フタセ・マモル)

主人公。貧乏人。著者も貧乏だが著者ではない。

守 二世 (モリ・ニセイ)

主人公の小学生からの親友。今で言う富裕層。当然著者ではない。

女

東山 美英子 (ヒガシヤマ・ミエコ)

下町の地主の娘。

登場人物

中原 夏子 (ナカハラ・ナツコ)
府会議員の娘。

上町と下村 (ウエマチ／シモムラ)
重要な脇役。二世守と守二世の中学の同級生。

その他

主人公の従姉	二世	波江 (フタセ・ナミエ)
主人公の初恋の女の子	北川	冬見 (キタガワ・フユミ)
主人公を慕う女子	西海	知秋 (ニシウミ・チアキ)
守二世の幼馴染で許嫁	南野	春夜 (ミナミノ・ハルヨ)